

曲亭馬琴の黄表紙成立における喜三二

清 田 啓 子

「駒沢短大国文」第七号に『曲亭増補万八伝』について」を書いてから十年近くの時がすぎた。その中でわたくしは、馬琴の黄表紙に喜三二の作品の影が濃いことを述べ、メモ的に二三の例を挙げたのであるが、放置する無責任を反省し、少しずつでも証拠だてをして行こうと思っている。

右の二三例とは、

1、材料、趣向を喜三二の作から得ている。例えば、「珍猷立曾我」の食物づくしが「花団子食家物語」に、「竜宮四国噂」の讃岐沖のわにさめが「曲亭増補万八伝」中の一章に使われる。「鼻峰高慢男」発端、息子の扱い方は「押絵鳥癡漢高名」に、同じく「高慢男」の天狗は「荒山水天狗鼻祖」に映されている。

2、演劇的素材のこなし方、ストーリーの仕立て方は、喜三二の方法に非常に近いように感ぜられる。というものだった。

メモとは言え、随分雑駁なものであった。それで、四国のわにさめや天狗や化物など、ふつうの素材は除き、主として方法、趣向に係るものを、作品毎に挙げてみたいと思う。

○「鼻峰高慢男」と「荒山水」及び「押絵鳥」

「鼻峰」は安永六年鱗形屋板、寛政六年蔦屋にて再板。内容は、上野屋万右衛門という分限者に一子あり、万吉と名付け、秘蔵したが、唯一の欠点は、鼻の低きこと碁石を一目付けたるごとし”であった。夫婦は大山不動石尊大権現へ祈誓し、一方で、人は高慢なれば鼻高くなることなれば（中略）われに優るものはあらじと思はせるやうに賤けよと”命じ、万吉の鼻は高すぎるほどになった。二十歳の頃、吉原で上方大尽ともてはやされ、鼻以ての外に高くなりける時”天狗にさらわれ、懲らしめられて、元の鼻に戻り、親許へ返される。

高慢＝天狗とは常識的なものであるが、息子の成長過程を

題材とし、高慢をたしなめられて「まことの人」に戻る結末は、「荒山水」に共通する。

「鼻峰」の万吉が終始親の保護下にあり、結末に於いても、大天狗が親に向って「悴には少しも咎なし、これみな親が育てやうの悪しきゆゑなり」と言い、親の歎きの深さを憐れんで返してくれることになっている。それに対し、「荒山水」の太郎坊は始めから独立独歩の生き方を選ぶ。この太郎坊の造型については、嘗て述べたので繰り返さないが、卵から生れた太郎坊について

羽の生へたは母の天人にあやかり、体の人間並なるは父の白良に似たり。鼻の高きは誰にあやかりしならん、案ずるに高慢くさき作者に似たものか。

と述べ、太郎坊に自身を投影したことを暗示している。

親の庇護を受けること浅かった馬琴が、「鼻峰」を読んだ時、同じ高慢息子でありながら、富にも親にも恵まれた万吉を見、反射的に、対照的な物語を思いついたのではなかったか。親の保護の有無のみならず、鼻が生れ付き低すぎると高すぎるのなど、「鼻峰」をばねにしているように感じられる。

次に、「鼻峰」の万吉は「八九歳にて手習を始め、絵をも稽古しけるに、至極無器用なりしが」親が人々に付届けをしをて褒めさせた。上手に褒める者には「馳走して金など呉れければ、物のいらぬ事ゆゑ、口に任せてやたらむしやうにほめ

てくほめぬきける」ということになる。人々は

異国の王義之、超子昂、我朝の佐理、行成も及ばぬ手だ。すごいと申さうか。さりとはかうじた事さ。などと言う。

この場面は、後に「押絵鳥癡漢高名」に用いられた。

京の金子九十九くもという金貸し浪人は、六十四郎という息子を恵まれたが、「何不足ない大たはけ者」しかし親の欲目からは立派に見える。この子の手習に飽きが来ないようにと工夫し、知音近付に褒める事を頼む。「褒め様の上手下手によって銭金をやりければ、口には物のいらぬものゆへ、我もくくつめかけ、六十四郎が席書をほめちぎる声雷のごとし」人々のほめことばは、

もろこしの王義之、我朝の佐理公、小野道風もはだして逃げ、近くは鳥石、広沢もまだ息災でゐられたら、六十四郎様の御手本を願はれませう。菅丞相の申し子か、弘法大師の再来か、さてく見事の御手蹟やの。と、大分あくどく、しつこくくなっているが。

「押絵鳥」のこの続きにくる場面は、ついでながら、喜三二とほのかな縁につながるものなので、しるしておきたい。

六十四郎の親は、子に立花茶の湯、狂歌俳諧も習わせる。人々はお金になるので褒めそやし、六十四郎は狂歌俳諧の点がしてみたくなるが、頼み手のない事は知れているから、親が点式の代りに金銀を貼り付けることにすると、我もくくと

点を取りによこした。

この話のとは、「後は昔物語」(手柄岡持II喜三二)(享和三年成)太申という人の話の条の、馬琴の附記(文化八年筆)に述べられているので引用する。

馬琴云。太申は三十間堀の材木屋にて、和泉や甚助といひし者なるよし聞伝ふ。ここにしるさるごとく、もつばら虚名を好て、夥の金をつかひうしなひしものなりとぞ。(中略)又俳諧の楽評をせしに、五点の所へ五匁銀、十点へは十匁銀、十五点へは金巻歩、カキヌキへは小判巻両をはり付つつ景物とせし事有といふ。

この附記によると、馬琴は太申について、かなりいろ／＼なことを知っている。そして文化九年刊の合巻「敵討仇名物数奇」は「ひそかに太申が事を擬した」ものであるという。

馬琴が、太申の事をいつごろ、どのようなかたちで知ったのか、手がかりはないのだが、「押絵鳥」(寛政九年正月刊)の頃であることは知れる。右の喜三二の随筆に書入れをしなから、太申の行跡を「押絵鳥」に活用したこと、その作は喜三二の作に負うものだったことなどを、彼はどのように思い出したことだろうか。

○「天道大福帳」と「加古川本蔵綱目」(寛政九)

「天道」は天明六年蔦屋板、寛政六年再板。古典文庫「黄表紙集 二」の水野稔氏の解説に、

地上の人間が天の意に動かされるといふ古くからの思想

が、手近な心学風の発想となって、草双紙形態の特色を十分に利用したもので、天地上下対照図という構成をとったところに斬新奇技が見られ、この方法は陰に陽に後の作品にさかんにうけつがれた。

とあり、黄表紙史に重要な地位を占める作であることがよくわかる。さらに同氏は、この方法をうけついで作品として、京伝の「心学早染草」(寛政二)、三馬の「天道浮世出星操」(寛政六)「親讐膏薬」(文化二)を挙げて居られる。

この内、年次的には「心学早染草」と「天道浮世出星操」とが「加古川」への影響を考へ得る作になるが、それよりも強く「天道大福帳」から直接的に「加古川」は学んでいると考へられる。

先ず、「天道大福帳」は、「天道とその配下の星の働きを、下界の「仮名手本忠臣蔵」の事件に対応させる構成をとる」(前記水野氏解説)のと同様、「加古川」も、その題名からすでに明らかのように、忠臣蔵の「序開から十一段目の大仕掛まで」を扱い、天道様とその弟子たちがいかにかかわったかを述べてゆく。

天道さまの役目を、「天道大福帳」が

そも／＼天道のおせうばいと申すは、善をなすものには幸いを与へ、悪をなすものに禍いを与へ給ひ、仮にも眞最偏跛のわたくしなし。

と規定したのを受けて、「加古川」は、

そもそも天道様は何が御商売だと思った所が、医者が御商売なり。

とする。仕事乃至役目を「お商売」と表現した喜三二の軽みを、馬琴は生まじめに手がかりとして用いることにし、続く文章に云うように、

天に風雨のわづらひあり、人に善悪の病あり（中略）病患ひばかりが病といふものではなし、悪事をたくむ悪者はみな一心の病なり。

等と、病の数々を思い浮べて、お商売を医者と定めたのである。

この方策が立てば、あとは連想とこじつけで、馬琴の筆はかるく運ぶ。

天道の役目は何かとする発想は、喜三二のこの作に負うものであると言えよう。

「心学早染草」の天帝は「常に、茶碗のやうな物へ、椋の実の皮のやうな物を水にて溶き、竹の管をひたして、魂を吹き出し給ふ」のが仕事である。人間を直接左右するのは、その丸くよき魂といびつになつた悪魂であつて、この篇中、天帝が自身手を下すのは、理太郎出生の時、入りこもうとした悪魂の手をねじ上げたことだけである。「加古川」とは構想が異なると言えよう。

京伝の作品を見習つて馬琴が黄表紙を仕立てたことはしばらく説かれている。「心学早染草」も馬琴はすでに「加古川」

の前年、「四遍摺心学草紙」として追隨した作を世に出して居り、「加古川」制作の際にまたも積極的に利用しようとしたとは考えられない。

また、「天道浮世出星操」は、世界は大戯場の如しとの観点から「天地一帯芝居にかたどり、諸事天帝の案じにて、もろくの星を下界へ天下らせ、天が下の御賜物を操りの如くつかはせ給」うとするものである。天帝は諸星のお裁きをなさるだけで、人間を動かすのは、善星悪星、酒星色星、恩愛星等々であつた。この諸星の働き方は、むしろやはり「四遍摺」の玉づくし——かね玉、性根玉、色玉、くす玉、くび玉、きも玉、かへ玉等々——に応用されたと見る方が妥当であろう。「加古川」には、天道さまの代脈としてお弟子の星たち（白星）が働き、病の元をなすのは「羅計火などといふ悪星にて、俗にいふ黒星」とするが、この白星黒星は、善魂悪魂（早染草）、善星悪星（浮世出星操）に限らず、当時の黄表紙界では常識的な設定と言つてよいと思う。

さて、「加古川」における天道さまやお弟子の星たち、黒星の働き方はどのようなものか。

「天道大福帳」では天道も「御そゝうにて罰利生をお忘れなさるゝ事も、まれにあり。御無理もない事也。」とか、「役人の星、与一兵衛を助ける筈の所を、少し怠りて山崎の方を見ずに祇園丁のあたりを見てゐるうち、つい与一兵衛を殺され」天道から叱責されるとか、「人間くさい失策を演ずる」

(前掲水野氏解説) いわば愛すべき存在である。

「加古川」でも、その「失策」を活かそうとしているらしいが、

お弟子の星たちは遅ればせに馳付け給ひ、判官が療治の手のびを悔み給ひ、まづ見舞ついでに勘平が命を助け、この所を落し給ふ。

という程度にとどまる。そして結局は、

天道様の御療治の届かぬ手負はみな定業に違ひはなし。との定式に納められる。馬琴は天道さまの権威を傷つけることができなかつたのである。

天道さま判官の療治は所詮難しきと思し召し、お弟子の星を出し給ふ所を、大星を出して一家中ののぼせをおし静め給ふ。

という、別趣の滑稽を生み出すことはできたのであるが。

○「女嫌変豆男」と「福寿海無量品玉」など

「女嫌」は安永六年、鱗形屋板。やめ右衛門という能楽者が「かの豆右エ門が身の上の自由なるを羨やみ、浅草の観世音へ一七日通夜申しけるに」豆を九粒与えられ、生ある物と魂をとりかえる自由を得る。うなぎ、蛙、遊女の飼うちん、見世物小屋のおうむなどに変じて危い所を逃れ、大名、かぶきの女方などにもなってみるが、最後には相撲取にこらしめられる。止右衛門が残りの二粒を「捨てるも恐れありと、何のあてどもなく飲みければ、魂抜出て中有にまごつきける

を」観世音が身体へ返して下さり、いましめられる。曰く、

貴人高官の人よりしも万民、禽獣虫魚に至る迄、生あるものに苦しみなきものなし。汝身の程を知らず、無理なる願をなしくゆへ、何の上にも相応に苦勞ある事をしらしめんため也。慎しむべし。

止右衛門は「物に飽き易く、ちと欲深き男」で、種々の経験をした後、観音に説教されるのだが、この、いわば不心得者が、遂には神仏の教化によって、まともな人間になるというパターンは、馬琴の好みに合つたらしく、形を変えていくつかの作に使っている。

「福寿海」は、普陀落屋大信郎という若旦那が、遊びの末に勘当される経過を述べた作で、その間、人の対応の仕方によって、顔が鬼に見えたり、地藏、公卿などに見えるというのを趣向としたものであるが、そして大信郎実は観世音という仕掛けがなされているものであるが、眼目は終りの観世音の説教である。

大信郎が放蕩を尽して拳句に説得されて真人間になるというのを一ひねりして、大信郎の流浪中に会う人間たち——金貸し、傾城、掛取り、乳母——が、両親、妻などと共に、観音から教化される。観音の説くのは、喜怒哀楽も、他人の顔が仏に見えたり鬼に見えたりするのも、全て心の迷いであるということ、及び、それ／＼が信すべき宗派をこじつけて指示することであった。

この説教に三冊十五丁の内の二丁を割いているのは、いかにも重苦しいが、内容と共に作者の狙い所がわかるものでもある。

「福寿海」と同年に出された「心学晦荘子」も、結末が、お天道さまの説教である。狂言回しの朝比奈が、鬼に会いたいものと化地蔵を尋ね、化物の楽屋を見抜いて鬼などもはやないものと悟った時、地蔵から、化物即ち人間なり、その元は心の鬼なりと説明される。そして頭の黒い鼠、風吹き鳥などを見、鳥類は天道の前へ連れ出して、教化して頂く。地上のものは、かの地蔵様へ頼みて済度させける。其場も見たいものなれど、紙数がこれきりなれば書かれず」と未練を残している。

喜三三の作における説教は、結末をつけるためのものという感じで、あくまで作の狙いは、他の生き物になってみるおもしろさであるのに対し、馬琴の作では、説教そのものが目的となったのである。

○「鬼嶋大通話」と「心学晦荘子」など

「鬼嶋」は天明五年、蔦屋板。桃太郎と酒吞童子退治の物語をないまぜにし、久米の仙人の失った通が虚空を飛んで大江山へ落ち、通の気散乱して、童子をはじめ鬼ども通となる。そこへ山右衛門お川夫婦も加わり、頼光一行を迎えて、大江山は遊里のようになる。久米の仙人も迷いこみ、千両の金を使い果し、呆然としている所へ、師匠の大通仙人が現わ

れ、教訓を垂れる。

通の講釈久しいものなれども、いづれも大なる気どり違ひなり。それ通は心にあつて形にあらず。頼光は武将なれば武将の道を尽して武を忘れぬを通とす。保昌及び四天王は臣下の道を尽すをもって臣下の通とす。姫君たちは官女たちもそれくゝの通あり。(中略)百姓の通、町人は町人の通、それぞれわが道を守るがもとなり。(後略)そして、通の漢字を大きく掲げ、一劃一点ごとに、仁、義、礼、智、信、尽^レ理、守^レ法、等々の語を当てて解説するのである。

この物語の全体は、同じ作者の先行作「按内手本通人蔵」(安永八年)と同想のものであろうが、大通仙人の教訓の堅さが異様に目立つ。

神仏その他の超能力者が出現して、教訓するパターンは、「女嫌変豆男」の項にまとめたので、ここでは、漢字の大胆な使い方、遊び方を、馬琴が取入れたであろう例として、「福寿海無量品玉」を挙げる。

放蕩の拳句、世をはかなんで家出した大信郎の跡を追って、両親や乳母、なじみの遊女、旦那寺の和尚、借金取り等が迷い出る。そこは

十二因縁の車、五道六道のそこを廻り廻りて初めもなく
終りもなく、途方にくれていたる

迷路のような所である。その道を示すのに、画面一ぱいに迷

の字の形が描かれ、その処々に、追つて来た人々が歩いたりたたずんでいたりする。人々の大信郎への思いは、心の迷いからということを視覚的に判らせようとした工夫である。

また、一点一劃ごとに絵解きする方法は、「鬼唄」の文字から絵へと転換されて、馬琴の理屈仕立ての滑稽に役立てられたようである。

例えば「安倍清兵衛一代八卦」で、清兵衛の母狐が易を子に教えるのに、片手と女の顔の図を示す。そして、指や、手のひらに描いた卦の表や、目口などから直線を引き、鼻ならば「火性は天狗、土性は団子、木性はざくろしし、水性は鼻つたらし」などという解説を書きこんでいる。

また、「心学晦莊子」の地藏尊が朝比奈に心の鬼を解説する場面では、心臓から生れ出た鬼の姿が大きく描かれ、「食いたいと思ふさつまいもは角になり、欲しいと思ふ指の輪は腕の環となる」などの文が、角や腕から引かれた線の端に付けられている。

絵解きの方法は、馬琴の、見立てやこじつけを盛りこむのに、非常に都合がよかったものと思われる。

○「三太郎天上廻」と「彼岸桜勝花談義」など

「三太郎」は天明三年、蔦屋板。「いにしへの通ふ神、いまの通の神」と角書にあるように、通ふ神が大通の神と変じ、「大町人の息子に三太郎という大の野暮ありけるを見出し、天上へ引上げ給いて、遂に大通となしたまふ」物語であ

る。廻り見る天とは、野暮天、ところ天、宗匠天、早合天、炎天など、地口仕立てで、一々の天の図は見立て絵になっている。

この方法は「彼岸桜勝花談義」と共通している。この作は、地獄極楽はこの浮世にあるという前置きで、芸の河原の師匠菩薩、三途河の伴頭さま、高利の地獄等々と続けられる。他には「鯨魚尺品革羽織」の前置き部分に「くじらの種類二十種ほど有り。人の思ひよらぬくじらばかり三つ四つ図にあらはす」として、山くじら、なめくじら、後生くじら、耳くじらを出し、見立て絵を付ける。

○「亀山人家妖」と「小蒙両見越松毬」など

「亀山人」は天明七年、蔦屋板。この作は喜三二の肖像が真に迫る点で評判になった。もう一つの特色は、「趣向に苦しむ作者自身を主人公として登場させ、(中略)作者の内側を暴露して作者自身を道化に仕立てて、読者の笑いをうけようとした」(「江戸の戯作絵本二」小池正胤氏解説)ところにある。この方法は、京伝、一九に継承され、馬琴にも不器用な口上を前置きの部分で言わせる作があるのであるが、それにとどまっている。

「亀山人」上の巻全体が序文の形をとり、その末尾に、「されば化かすも化かされるも皆人の心にあり」というきまじめな言がある。さらに末尾には「則ち化物と申すもみな心より起ることにて、心正しき時は化物にもあわず。みなこの

心の迷いでござる」とある。

いわば常識的な、心学風理論を、喜三二に見出すのは意外なことだった。が、この作では、本筋のおもしろさに融けこんでいて、気になるものではない。けれども、馬琴の「小霧両見越松毬」は、この「理論」を基に案じ出されたもので、主人公嘉三郎は臆病ゆえに

神棚のおかめの面がにこくと笑ふやうに思はれ、これはたまらぬと思ふやいなや、帖り交の手の形が襟もとを撫でるゆへ、びつくりして振返れば、忽ち箒に目鼻がつき、七輪にかけて置いた薬罐は天狗に見へ、摺鉢摺子木鍋釜まで、一度に踊り出しければ、嘉三郎わつといふて気を失ふ。

というだらしなさである。さまざま怖しい目に会った末に、ようやく

はじめて心の迷ひを知る。まつその如く、只かりそめに怖い／＼と思ひしゆへ、目に遮るもの皆化物の如く見え、土の小判も金と思へば忽ち心の迷ひもとける、そうじゃそうじやと

心が落付き、主人の娘と祝言をあげる。

「心学晦荘子」にも、同じ「理論」が述べられる。朝比奈を呼び止めた化地蔵に、

わしは化けたことはなけれど、人間の臆病者、手前の心に化かされて、わしを化地蔵／＼といいますが、化物は

則ち人間なり。その化物の始りは人の心、

と言わせているのである。これは、化物の楽屋を見て、もうこの世に鬼はいないものと悟った朝比奈に、地蔵が、化物となった人間を見せようとする、ストーリーの転換点になっており、筋の中にこなされてはいるけれども、「小霧雨」と同様、発想の種として用いられたものであった。

○「一粒万金談」と「押絵鳥癡漢高名」

「万金談」は天明元年、鳶屋板。神田の大分限福屋徳兵衛の息子六十四郎は、「愚かなる生れ付に、百の口が三十二文は確かに抜けた男」物事しまりなく、鈍思いつきばかりして金をつかふもてあまし者として、冒頭に紹介される。ムシロウとよむこの珍しい名を、馬琴はそのまま「押絵鳥」の主人公に用いた。

九十九つくもが一子は、百の口を三十二文ぬいて（阿房羅刹あへんより）援かりしゆへ、そのまゝ名をも六十四郎と名づける。

とし、愚直を絵にかいたような六十四郎が、学問にのみ没頭するさまを描いた。「万金談」の六十四郎が蕩児の典型であったのに比し、「押絵鳥」には、やはり馬琴流の活かし方でその名がつかわれたのであった。

以上、おぼつかない手付きで、喜三二の作に、馬琴の黄表紙の方法や趣向の対応するものを見てきた。

以前、「曲亭増補万八伝」について」にしろしたように、馬琴にとって、春町喜三二でなく、なぜ喜三二春町だったのか、その手がかりが求められないかと考えたからである。

片方で、その方法や趣向は、喜三二独自のものではないのだが、という思いに引きずられながらもではあったが、やはり喜三二から積極的に学んでいたのではないかと思っている。

喜三二の「有名でない作品」の中に、意外にきまじめな発言が多い。「天道大福帳」の解説に於いて、水野稔氏は、天道様を道具にするが近年のはやり也（三馬）の言を引いて、心学教訓ばやりの寛政期に、得たりとばかりに利用される因子がすでに蔵されていたことは否定できない。と述べられた。

そして寛政六年に蔦屋が再板した春町喜三二の作は、「金々先生学花夢」「高慢齊行脚日記」「三幅対紫曾我」「鼻峰高慢男」「桃太郎後日話」「天道大福帳」であった（『日本書目年表』による）。この再板は、繁栄を続ける蔦屋が、寛政改革の暗雲の下でも安全と考えて出したものであったろう。この、二者三作ずつに限っても、喜三二の方が馬琴への影が濃い。

馬琴が蔦屋に奉公したのは寛政四年であり、「戯墨の才ある故を以て」迎えた蔦屋は、蔵板の書その他を彼に読ませたであろう。

馬琴の道学的性格を考えると、先輩諸作品を読みつつ自ら

の触角にふれてくるものは、喜三二のきまじめな発言だったのだと考えられる。蟹は己れの甲羅に似せて穴を掘る——と馬琴流の警句引用を試みたくなるところである。

黄表紙本文の引用は、読みやすくするため、私意に漢字交りの表記に改めた。（一九八四年一月）